『社会科学ジャーナル』66〔2008〕
The Journal of Social Science 66[2008]
pp.*95-118*

新しい人

金山　梨花 *

Ⅰ．はじめに

グローバル化における異文化接触の機会の増加は、新しいアイデンティティの出現の可能性を与え、個人のアイデンティティを形成する枠組を大きく変化しようとしている。これまで国際化やグローバリゼーションは、人のアイデンティティの変容について二つ異なるアイデンティティを顕在化してきた。一つは共通の歴史、先祖、領土、また同一の文化を共有していることを根拠とするナショナル・アイデンティティの強化である。グローバリゼーションによる西欧文化への画一化という大きな流れは、これに反発する正反対の動きで文化の伝統や独自性を主張し再評価しようという傾向をもたらしている。こうした相反するふたつの方向性は、世界中にナショナリズムの「細分化」を起こし、マジョリティ・ナショナリズムやマイノリティ・ナショナリズムなど集団同士の不協和音と集団内部での不協和音を誘発している。冷戦後に発生したほとんどの紛争の原因は、こうしたナショナル・アイデンティティに代表される集団的アイデンティティの異化作用と密接に関連している。

しかし、その一方で、同じグローバル化においてもナショナル・アイデンティティとは異なるもう一つのアイデンティティのあり方が顕著になってきている。それは、S. ホールがディアスポラ（離散）・アイデンティティと呼ぶものである。ディアスポラとは、もともとユダヤ人に使われた言葉として、民族の分散・離散、祖国の失われた状態から発生したものである。このアイデンティティは、集団の同質性に固定されたものではなく、ハイブリッド性に特徴づけられた個々人に存在する様ざまな異質性や多様性を認識するものである。(1) それは、国民国家と呼ばれる集団が世界を覆い、互いに自国の存在を過度に強調し、競い合う現代世界で、自由な主体的個人として普遍的な「人間として」生きることを試みている新しいアイデンティティのあり方であ

* 国際基督教大学大学院行政学研究科博士課程修了、学術博士
国際基督教大学アジア文化研究所研究員
国連第４回世界女性会議・ナウル共和国元特別顧問

る。本稿は、特にこの後者のディアスポラ・アイデンティティに焦点を定め、グローバリゼーションにおける人の国際移動とそれに伴う異文化接触がどのようにアイデンティティの変容をうみだすのか、日本の在留外国人、あるいは移民とされる 6 人のインタビュー調査結果をもとにそのような「新しい人」のアイデンティティのあり方を紹介していきたい。

周知のように日本社会は、象徴天皇制を中心に今だ単一民族国家の言説や外国人市民に対する排外主義が横行している。国旗・国歌の法制化によって急速に進められる民族主義・国家主義は、小泉元首相の靖国神社の連続参拝、拉致問題をめぐる朝鮮共和国敵視政策などに連動して今や戦後史においてナショナリズムの復権がピークに達している。そうした日本を背景に選ばれた 6 人のインタビュー対象者は、まずフィンランド出身で日本に移住し参議院議員となった**ツルネン・マルテイ**、在日 2 世のヴァイオリニストの**ジョン・チャヌ**、スウェーデン人の父と日本人の母の間に生まれ、後に無国籍となった経験のあるピアニストの**フジコ・ヘミング**、ペルーに日本人の移民の子として生まれ、日系で初めてペルーの大統領となり、日本に亡命経験をした**アルベルト・フジモリ**、幼い時から母語とは異なるバイリンガル教育を受け、女性大使として日本に駐在した元ルクセンブルグ大使の**ミッシェル・プランシェール＝トマシーニ**、また数々の異文化を体験をバネにして強力なリーダーシップによって日産自動車のリバイバルを達成した**カルロス・ゴーン**の順を追って紹介していきたい。

一般に「著名人」といわれるこれら少数の人びとをインタビューの対象者として選んだ理由は、対象者一人一人の調査結果が誰にとっても興味深いものとして読まれ、それらの人びとのアイデンティティ形成にまつわるライフ・ヒストリーにおいて決して数字には還元できない人格の個有性の側面を認識できるような質的調査に重点を置いたからである。そして、この質的調査をさらに高めるために、それらの人びとが著名であるが故に豊富に存在するバックグランド・データーを予め分析して、個人個人によってまったく異なる状況にそった質問事項の作成を試みた。それは、時間的に限られたインタビューを最大限に活かすために、こちら側の一方的なインタビューの内容を相手に理解させて答えてもらうという方法はあえて避け、相手側のコンテクストに沿った質問事項を準備し、インタビューの対話の過程で心を開いてもらい、極めてパーソナルなレベルにおける彼・彼女らのアイデンティティのあり方の実態調査を行うということに努めたからである。

なお、限られた紙面の関係から、インタビューの内容と調査結果を二人ずつ、3 回

に分けて掲載していきたい。今回は、ツルネン・マルテイ参議院議員と在日のヴァイオリニストのジョン・チャヌにスポットをあて、異文化接触に関わる理論を適用しながら、これらの人びとの新しいアイデンティティのあり方を解明していきたい。

Ⅱ. ツルネン・マルテイ：フィンランド生まれの移民一世の場合

1940 年、フィンランド北カレリア生まれ。1967 年、キリスト教の宣教師として来日、東京長沼日本語学校で 2 年間学び、児童養護施設で 4 年間働く。1974 年宣教師を辞職。1975 年より日本古典文学の翻訳、英会話塾、講演活動を行う。1979 年日本に帰化。1992 年湯河原町議会議員に当選。1995 年町議を辞職し、参院選（1995 年－ 1998 年－ 2001 年）、衆院選（2000 年）に立候補し惜敗。2002 年繰り上げにより参議院議員初当選。現在 2 期目、参議院環境委員理事を務め、環境問題に積極的に取り組む。フィンランド語はもとより、日本語、英語の 3 ヶ国語を使い分ける。

1. インタビュー

外国出身で初めて、日本で政治家となったのは、民主党の国会議員ツルネン・マルテイ議員である。彼と出会ったのは、著者が企画した講演会にツルネン議員を招いたことがきっかけであった。その講演会でのスピーチのタイトルは、「 世界が私の属する国、人類が私の属する民族 」で、まさに新しいアイデンティティの持ち主として、彼にインタビューをお願いすることになった。インタビューは彼のオフィスである永田町の議員会館で行われた。

Q）先生が日本に来られた初めの頃はどんな変化を体験しましたか。その様子をお話ししてください。

初めて日本に宣教師として来たときは、主に社会福祉の専門（牧師ではない）をしていました。今振り返ってみると自分の中で何か大きな変化がおきたと感じたのは、ケースワーカーとして児童養護施設で働いていたときです。ルーテル教会の施設でしたが、職員たちからの差別の壁を感じました。一般の職員たちや保母さんなどは特にクリスチャンでもありませんでしたから、外から来た宣教師としての私と付き合っており、最初から仲間ではないと感じていたようでした。その頃、私は日本語を 2 年間勉強しただけでしたから、勿論言葉の壁もありました。そして、4 年間奉仕いたしましたが、あくまで外国人として、距離を置いた接し方をされていました。それに宣教

師でしたから、クリスチャンだということで、他宗教の人々から受け入れてもらえないという葛藤もありました。

このままでは日本の社会の中に入れず日本人と同じ立場になることはできないと思いました。なぜなら、教会には日本の一般の人たちの世界が見えてこないのです。私の所属していた教会はとてもコンサーバティブで、ミーティングの後にお酒を飲んだり、タバコを吸って、ほかの人とコミュニケーションを計ることが許されませんでした。決して呑み過ぎたりするわけではなくても、お酒を飲むのもタバコを吸うのも罪と非難されたりしました。フィンランドの教会時代でも自分はアウトサイダーでした。非行少年たちのカウンセラーをしていましたが、一緒にキャンプに行ったりして教会から非難を受けました。フィンランド時代はお酒を飲んだりしませんでしたが、教会以外の場所でも彼らと付き合うことを自分は当然すべきことだと思っていましたが教会から認めてもらえませんでした。そういう教会のやり方ではメンバーも増えないと思いますね。日本では児童施設だったので施設自体が奉仕活動ではあったのですが、でもその運営のやり方とか、例えば、私は駅でチラシを配りたかったのですがどういう訳かそれは良くないということだったのです。そんな教会の仕事に対しても抵抗がありました。6 年間の奉仕生活の中で日本人の児童員の方が遥かに色々と仕事をこなし世話をすることができ、いったい自分には何か役に立つところがあるのだろうかと感じ最初の 2 年間に色んなジレンマを感じました。次第に日本人になりたいと思う気持ちも強くなって、それで、他の宗教の人びとのことを知るためにもキリスト教の壁の外に行く必要があると考え、宣教師を辞めて教会を離れる決心をしたのです。前の妻は私が教会を去るときに、教会を去ることができず結局離婚したのです。フィンランドでは宣教師が離婚した場合、家族はフィンランドに帰るので妻と子供もフィンランドに帰っていき、私一人で日本に残ったわけです。

Q）やはり奥様は宣教師という枠から出ることはできなかったのですか？

できませんでした。彼女は、信仰深く、使命というか、一つの宗教の中に入っているということでできませんでした。離婚後は 3 人の子供たちとの教育を一緒に担い成人となった今もいまだに会っています。

Q）それにしても、宣教師を辞めたことによって大きな犠牲を払い様々な葛藤を経験したのですね。

妻と離婚して小さな子供たちと別れたときは、5-6 年間ほど気が狂うくらいに苦しみました。よほど戻ろうかと思いましたが、そのときには日本にすでに家族がいたのでそれはできませんでした。その家族という大きな山を乗り越えることができたあとは、私にとってのトランスフォーメションでした。すべては、本当に過去となり許されていると。新しくなった自分は今後、どのように社会で役に立てるかそれを見つけるまで時間がかかりました。宣教師を辞めた後は生計をたてるために 20 年間英会話を教えたり翻訳をしたりしていましたが、自分は英会話を教えるために教会を離れて、離婚までして日本に残ったのではない、何かを見つけなくてはという葛藤がありました。何のために生きているか？私の人生の 23 年間ぐらいは自分のアイデンティティを探して、そのために血圧が高くなったり体調がストレスで悪くなるほどでした。しかし、急に悟ったのは、自分が議員になることでした。自分が選挙に立つことを決めてから、そこから全てが変わりました。これが自分の運命であると悟ったのです。 1 回目、2 回目の落選をしたときは、そのときは神がまだ自分の時がまだ来ていない、もっと勉強をしなさいといっていると思い次に向かってがんばったのです。でも、 4 回目に落選したときは自分の年（60 歳）など考えて、1 週間くらいは迷いもありダウンしましたが、もう一度がんばろうと思ったらご存知のように繰り上げ当選をしたのです。今は、政治の世界で宣教師の立場を果たしていると思っています。これは自分の歩むべき道、神様が導いてくれた道だということを疑っていません。それに必要な知恵、健康も与えられると思っています。考えてみると外国人がこんなに大変なことをできるはずがないのですが、神様の導きでできたことです。

Q）先生は自分から日本の社会に溶け込む事で、表面的ではなく心の中に日本人から何か影響を受けましたか。

そうですね、たとえば、宗教のことですが、私の日本人の妻共々、二人ともクリスチャンでありながら妻の両親の願いがあったので、神社で結婚式を挙げました。私は神様は何処にでもいるので別に構わないと言いました。でもフィンランドで真面目なクリスチャンの人にとっては、結婚式を神社で挙げることを決して理解してくれないでしょう。私のバックボーンはキリスト教ですが、日本で他の宗教についても理解できるようになったのです。フィンランドでは 90％以上の人がキリスト教で、日本とは全く違う状況です。日本ではキリスト教は多くの宗教の中の一つであるので、日本とフィンランドでは宗教に対する考え方が違うのです。ルーテル教会がクリスチャン

を増やすことだけを考えていたのでそれに抵抗を感じました。クリスチャンがもっと日本の社会で“世の光である”という立場を取り、選ばれた人たちは宗教の枠を超えてしなくてはいけない。私は今も教会に行ってお祈りもしますが、他の宗教の人とも交流があるし、また国会議員の立場でも知る必要があります。私はもう一つの宗教と付き合っているんです。モアと付き合いが始まったのは、宗教と切り離された環境回復運動（地上天国）の中でです。彼らの地上天国は有機農業を広めることで、以前は無理だったのですが、今は新しい技術で広がっていてやはり教祖の教えは正しいということで広まっています。彼らと私は環境回復運動で同じ考えを持っているので選挙の時には勿論今も応援してくれています。また私の講演会のメンバーに神主がいたり、お寺に講演に行ったりもします。私は自分のバックボーン（ルーツ）があればどんな人と付き合っても良いと思います。どこにいても、お寺にいても神様にお祈りをすることはできます。

Q）先生の生き方はナショナリズムを超えているとおもうのですが、人のアイデンティティの中でナショナリズムの固い殻が中核にある人が多いのですが。

バックボーンとしてはありがたいですが、民族意識が強くなればなるほど紛争が絶えません。それでアラブの国でも同じ問題があります。自分の民族を強調しすぎるのは良くないことです。この国は自分の住むところという考え方であるべきで、日本に住んでいる韓国人も自分が日本の社会で全ての住人のために何ができるのか、ということです。私が最後に言ったモットウは「世界が私の属する国、人類が私の属する民族。」 国際人になるとそういうことになります。私はフィンランド人でも日本人でもない。それは気にならない。そういう意味では私は世界が自分の国であり、今日本で国会議員として働いているのは日本人のためというのはほんの一部であり、世界のために、世界の中の一人として何ができるのか、その期待に答えられる国になるようにということです。私は日本人ではないです。キリスト教の教えではないですが、倫理転生を信じたいと思っています。今回、自分は日本で働くために生まれてきました。今回は天国から派遣されてきた、そうなると民族はどうでも良いのです。かといって自分が育てられた環境、自分の家族や親などはありがたいです。

Q）先生のおっしゃる地球市民という考え方をどのように日本の政治のなかで反映するお気持ちがあるのですか。

最初は日本人になりたかったのでしたが、議員になろうと決心したときから全くありのままの自分で、元外国人としていることを決めました。しかし、周りは青い目の議員として、外国人としてみています。日本人から見て自分は、日本の国籍を取得しても日本人としてみてもらえないし、また日本人も私が日本人になることを期待していません。ツルネンはツルネンのままでいいのではないか。また外国人として日本の社会に貢献できるのではないかと感じました。外から見た日本の社会、湯河原の議員の時からも在日韓国人やほかの外国人たちとも付き合いがあり国際交流のセミナーやパネラーとして参加したりしました。私は、日本で国籍は取っているがやはり日本に住んでいる外国人の一人だと思っています。最初私の仕事は外国人達の代弁者になりたいと強く思っていましたが、今はそれも自分の役割の１つではありますが、日本の国会議員として他の仕事もしなくてはなりません。でも外国人も私の仲間であり、日本の社会の中の地球市民だと思っています。彼らは、私に参政権の問題などで彼らの代弁者として期待をしています。講演に行くと色々な差別の問題も取り組んで欲しいなどいろいろな要望を聞いたりもします。彼らも日本で自分のアイデンティティを見つけられず悩んでいます。国籍はどうであれ、彼らも日本の市民です。日本人も外国人の立場を理解して欲しいと思います。また共生することが必要です。いかに彼らを構成員として認め、それぞれ自分の文化、背景を大事に活かしながら共に助け合い日本で生きることが重要です。気持ちまで同じになって、日本人に同化する必要もありません。帰化したい人はすれば良いし、したくない人はする必要がない。フィンランドではこの点においては非常に割り切って考えています。フィンランドでは必要がないので帰化する人が少ない。帰化しなくては国会議員にはなれないがそれ以外に関しては特に困りません。地方参政権は勿論与えられます。ＥＵの加盟国の国民であれば町に３ヶ月住めば参政権が自動的にもらえます。日本からであれば２年住めば参政権をもらえるのです。一番面白いのは、日本の家族がフィンランドに行くとすると、その日からフィンランドが外国人の子供に対して教育を与える義務が生まれることです。これは日本にはありません。フィンランドでは生まれた瞬間から市民として認められ、翌日から健康保険が使えるのです。保険料一円でも支払っていなくても、医療が受けられるのです。

Ｑ）人権が行き届いているんですね。

そう、それはそう、というよりもその国に住んでいる全員が社会の一員であるとい

う考えです。同じ権利と同じ義務があるという考え方です。参政権についてはスウェーデンの方が早かったようですが、法律がどうのこうのというよりも社会そのものは外国人も社会の一員としてみています。フィンランドの法律は昔から全て外国人も含むという法律です。日本では、全てほとんど日本人のためだけの法律です。教育もそうでしょう。日本もそういう社会になるといいです。でもそれはすぐには無理です。程遠いです。

Q）日本では血統という概念が幅をきかせていますね。

単一民族というのが日本では強かったから、違う血の人間も日本にも住んでは良いが彼らはよそ者という考え方が日本の社会にありますね。日本で小さな村にいったら日本人でさえ長期にわたり住んでもよそ者です。そこで生まれ育った人だけが本物の市民として扱われるのです。背景は良くわからないですが、そういった考え方が日本にはあります。税金を払う義務だけは外国人にもあります。でもその血統主義というのは帰化した人たちは血統ではないですね。帰化しても国会議員になれない国はたくさんある。例えばフィリピンなど。フィンランドでは勿論可能ですが。

Q）日本の憲法は国民は... 国民は... という文言で始まってますが、英語だとPeopleになっているのですが。

私は憲法調査会のメンバーで、それを変える必要があると思っています。Peopleも国民と市民という両方の意味があるので。

Q）他の外国人とは何か通ずるものがありますか。

あります。外国人とは仲間意識があります。外国人と接するとき、親しみがあるし、彼らも私の立場もよくわかってくれます。特に西洋人との考え方に通じるところがあります。文化が似ているからです。韓国人たちとも付き合いが多くあるせいかもしれないが親しみをもっています。日本人とは同じレベルになかなかなれず、まだ壁を感じます。民主党の議員としても、周りの議員がとてもよくしてくれますが、やはり彼らはツルネンがどこまで日本を理解できるのか言葉には出さないけれど疑問に思っている人たちもいるようです。でも、国籍を問わず外国人といると仲間という感じがしますね。

Q）異文化関係などに関して、何かコメントしたいことはありますか。

私の講演のときに在日外国人の人たちにお願いしていることがあります。それは何かというと、外国人が自分は日本人社会から受け入れられないアウトサイダーだと感じていることがありますが、その原因を日本人だけのせいにしないで欲しいということです。それは外国人にも半分責任があるということです。例えば在日韓国人が日本の中で認めてほしい、参政権の件もそうですし差別が無くなるように運動するのも必要だが、日本の社会への参加はそれだけではなく、国籍とは関係なく外国人が自分なりに日本の社会に貢献できることを見つければ日本の構成員として認められることにつながります。自分の文化も民族も大切ですが、自分の集団を越えることも必要です。今、川崎では、在日外国人たちの議会のようなものがあります。その外国人達の問題を主に、最初は差別をなくす運動などをしていましたが、自分たちの問題だけでなく外国人の立場で川崎市を住みよくするために活動をしていくように勧めています。

Q）自分の枠を超えて外に出るというのは必要なんですね。

横浜にある、外国人妻達の、主に西洋人のセミナーでのタイトルを「Japan Needs Us」というタイトルをつけました。日本にとって自分たちも必要であるという、それにより日本もよい方向でいい意味でグローバル化されるといいと思う。それで、日本の国会で、私のようなものががんばっているわけです。

2.「世界が私の属する国、人類が私の属する民族」

政治家として日本で活躍しているフィンランド出身のツルネン・マルテイのアイデンティティの変容は、彼が日本で体験した異文化接触における著しいカルチャー・ショックとアイデンティティ・クライシスに特徴づけられる。この体験は、彼の出自によるフィンランド人としてのアイデンティティ、すなわち国籍、民族、文化の拡大を迫り、長年つれそったフィンランド人の妻子との別離、そしてクリスチャンとしての信仰は捨てることはなかったが彼の属していたルーテル教会からの離脱を余儀なくして、新たなアイデンティティを探求するために彼が日本に残る決意をさせたのである。彼とのインタビューにおいて、その時の内的葛藤を語る彼の様子には、その時の心の痛みがどれほど痛烈なものであったか想像を超えるものがあった。アドラー（Adler 1975）のカルチャー・ショックの 1 ～ 5 段階 (2) のプロセスを辿り、ツルネンのアイデンティティの変容を分析してみると以下のようになる。

1）**異文化との接触**：この時期はよく新婚生活のハネムーンに譬えられる。1967 年、フィンランドから妻子とともに日本に宣教師として赴任し、夢や希望に心は膨らんでいる。初めて日本に着いたツルネンは、「神のご加護によって、任務を果たすことに努力精進します。どんなことがあっても、くじけずにがんばります。骨を埋める覚悟で、この国にやって来ました。」（ツルネン 1993：62）と語っている。表面的な文化の違いが珍しく、テレビのホーム・ドラマや『水戸黄門』を楽しみ、日本食は何を食べても最初の一回で好きになったという。

2）**自己崩壊**：この段階では、ツルネンの直面する日本文化・社会と宣教師としての役割のギャップに圧迫され、不適応と疎外感を感じ始める。インタビューでもツルネンが語ったように、1970 年から 74 年まで大分県別府市の教会付属児童護施設に派遣され指導員として働いていた時期がこれにあたる。日本の社会にも入れず、宣教師の仕事にも意義を見いだせなくなってしまっていた頃である。

3）**自己再統合**：この時点で、外国人として浅く表面的に日本人と付き合い再び第一段階に戻るか、それともすべてをあきらめてフィンランド人として自国に戻るかという決断に迫られる。ツルネンは第三の道を選び、自らの強い願望である「日本人になる」ことを決意する。そして、その代償行為として、フィンランド人としてのアイデンティティを捨て去るべく、宣教師を辞任、教会を離れる決心をした。そして、彼は教会から離れることができなかったフィンランド人の妻とも離婚、彼の小さな 3 人の子供たちとも別れて一人日本に残ることになった。

4）**自律**：文化相対的視点が見えはじめるときである。この段階になると無理に日本人になろうとすることもなく、フィンランド出身で多文化的なありのままの自己を受容することが可能になる。フィンランド語、日本語、英語を自由に使いこなし、この頃始めた日本の古典や現代文学の翻訳が生きがいとなり、現在でもライフワークの一つになっている。日本の生活に馴じんだ行動がとれるようになり、新しくなった自分は今後日本社会で役に立てるべく議員になる志を立てる。

5）**独立**：現在、ツルネンはこの段階に達し、自分の使命を悟り、日本で初めての外国出身の国会議員として自己実現を果たした。日本の文化に沿って行動できる

だけでなく、フィンランド出身の国際的な視点を政治の分野で活かしている。ツルネン個人としての柔軟な性格と自律性が出てくる。そうした彼のアイデンティティはさらに拡大し、ユニークな個人としての世界市民である。彼はもはや日本人やフィンランド人としてではなく、「世界が私の属する国、人類が私の属する民族」をモットーにひとりの「新しい人」になったのである。

上記5段階のプロセスから考察できる一般的な視点を述べれば、グローバル化によるアイデンティティの変容においても、私たちが異文化接触におけるこのような段階的なパースペクティブを持つことが重要である。ツルネンが「自己再統合」の段階においてフィンランド人としてのアイデンティティを切り捨てることによって日本人のアイデンティティをもつという二者択一（either or）の切迫したアプローチは、現在グローバリゼーションのカルチャー・ショックによって沸き起こる様ざまなナショナル・アイデンティティの排他的な本質主義と共通するところがある。しかし、私たちがこうした異文化接触におけるプロセスの段階的な視点をもつことによって、いたずらにナショナリズムの過剰反応に翻弄されることなく、自制心を利かして「自己再統合」の段階を乗り越えることができるのである。そして、多文化を自己に内在化させつつ互いの文化を相対化させ、「自律」の段階におよび、さらに「独立」の段階に進んで、様ざまな固有文化の差異を超越する個として、より普遍的な自己を実現することができるのである。

Ⅲ. ジョン・チャヌ：在日韓国人の場合

1950年、在日韓国人として岡山に生まれる。桐朋学園大学を経て、1969年からパリ国立音楽院で、ヴァイオリンをミシェル・オークレールに、室内楽をジャン・ユボーに師事。同大学院修了後、韓国国立交響楽団、東京交響楽団、韓国KBS交響楽団などで首席コンサートマスターを歴任。1988年から1999年まで韓国延世大学教授を務め、大学での指導の傍ら世界各地でヴァイオリニストとして活躍。2000年より拠点を日本に置き、演奏活動を続ける。

1. インタビュー

著者が「裸足のヴァイオリニスト」といわれるジョン・チャヌの存在を知ったのは、一冊の本を通してだった。何気なくつけたテレビ番組に放映されていたのは、新刊の

図書を紹介する番組で、司会者が『音よ、自由の使者よ』というタイトルだけを告げて番組は終了した。何のことについて書かれている本かも分からないまま、妙にタイトルだけが著者の心に中に響き、どうしても気になり本屋に行ってその本を開いてみると、そこにジョン・チャヌと呼ばれる在日韓国人のヴァイオリニストの半生が書かれていた。そこには、「朝鮮人」、「日本人」の二つの「あいだ」に存在する「在日」として生を受け、日本、パリ、韓国、そしてまた日本へと異文化を往還しながら、ヴァイオリンが奏でる音の世界の中で国境や民族を越えようとする自我の苦闘の日々が記録されていた。そして、その長い旅は、彼の民族のアイデンティティを求める旅から、いつしか一人の人間として生きる旅に変わっていったと書かれてあった。その本との出会いからほどなく、著者の知人が幸いジョン・チャヌの知人でもあることがわかり、その人を介して彼とのインタビューが実現する運びとなったのである。

Q）『音よ、自由の使者よ』を読ませていただいて、同じ韓民族ということで韓国の女性とご結婚され、韓国で結婚生活し、そして離婚するいきさつが書かれてありましたが、ご自身の「民族と結婚」観についてお話ししていただけますか。

そうね、同じ民族で理想的な結婚だと思っていたけど、彼女も向こう育ちだし、そこに何か乗り越えられない大きな壁みたいなものがあった。最初は好きでお互いを理解しようとしたけど壁があった。何年かは壁を越えたように思えたけど、でも韓国でずっと永住して習慣に合わせてそこで仕事もしていかないとなるとなかなか理想どおりにはいかない。というのを経験した。僕の親なんかは韓国人どうしだから絶対上手くいくといったよ。日本で生まれ育ったが日本人と結婚すると大変なことが色々とあるから、恋愛とは別に結婚だけは韓国人と絶対結婚しないさいとずっと言われてきた。それをずっと信じて、韓国人と結婚したけれども、でもふたを開けると国際結婚より難しい。お互いに分かり合えると思ったことがだんだん分かり合えないとわかった。普通の国際結婚というのはお互いが分かり合えていないからだんだん歩み寄っていけばよいのだけど、僕達の場合は「同じ民族」ということで最初から絶対分かり合えるというのが前提だから、だんだんほころびというか、距離が開いてきた。

韓国での生活でも、「同じ民族」ではどうしても埋められないギャップが出てきてね。僕も最初は言葉ができなかったから、彼女は対外的なスポークスマンというかマネージャーの役割を果たしてくれてね。例えば、日系ブラジル人や日系のハワイアン

は習慣も言葉も違うでしょ。それで日本にきて一人で生きて行けると思う？多分無理でしょう。それで日本の女性と出会い恋愛をして、彼女が色々と便宜を図ってくれたり、電話のやりとりとか色々してくれるから、日本で仕事が出来るようにはなるかもしれないけど、その彼女がいなければその人はほとんど生きていけないんですよ。僕は音楽家だから言葉をかえさない仕事だけど、でも人間関係では言葉をかえしたり習慣の違いや色んなことがあって、摩擦が生じるわけ。それで妻が自分の代わりに代弁してくれたことが随分あったんだよね。それにご存知ないかもしれないが、韓国の社会は凄く足のひっぱりあい。日本以上に、それは凄い。それで、彼女は僕の防波堤になってくれて、色々やりくりしてくれてた。最初は彼女もピュアな感じだったけどだんだんすれた感じになってきて、彼女もせっちたけてる。ある意味純粋だけでは生きていけないから、世間に対してどのように動けば有利なのかを考えるようになったんだね。あの人間社会では手も足もでなくて、僕は鳥かごの中に入れられていただけだから...もう完全に外国だし、外国以上。というのは結婚もそうだけど。自分が日本に帰化せず韓国人だといっているでしょ。だから韓国人といえば皆同じように扱うわけよ。日本人であれば手加減したり、お客様だったり、遠慮があったりするけど、ところが韓国人ということで丸裸で付き合わなくてはならない。だけど僕の背景は日本なわけ、だから、一世たちは自分のふるさとはあそこだから望郷の念も強いけど、僕たちにとっては韓国といっても全然記憶がないんですよ。だからこれはやっかいで、帰るといっても外国に行くような感じで、でも韓国人だから外国人とは見ないのよ。ここに凄いギャップがあって、物凄くつらいんだよ。

Q）何十年韓国に？

トータルすると 18 年。そう乗り越えられると思っていた。愛があれば大丈夫だと思っていた。血を信じていた。それが裏切られたというか、僕にもっと順応性があればよかった。あるいは僕が韓国にもっと溶け込んでいればよかったのかもしれない。でも自分のことを捨てきれない大きなものがあったんだよね。

Q）その辺をもっとお話しくださいますか。

だから、自分のことが捨てられないということは、芸術家は自分を捨てたら何を表現するかということにもつながってくるから、そのときのアイデンティティというか、それは自分はいったい何なんだろう？というか、僕が韓国人だから向こうに居るから

そのままそういう状況に流されるとしたらだんだん自分が息苦しくなって自分の表現したいものがなくなってくるのではないかということ。

Q）それまで民族を表現していたのですか。

民族は表現していない。だけど出てくるものが他人に言わせると、韓国で演奏をするとあなたはとっても繊細で日本人みたいな感性を持っているとかいわれ、日本では日本人にない大きさがあるとか大胆とか言われるでしょう。他人はそういう風に見られると、おもしろいなあと思うのは、自分には二つの要素があるのかな？あるいは所変われば見方が違うのかな？そこで何か民族とか血とかが自分の音楽に左右しているのかな？国籍は、初めから音楽に全然関係ないけど。あの『音よ、自由の使者よ』の著者は、実際に何回も僕の音を聴いて、僕の音には日本の人には出せない音が表現されているというのね。自分では良くわからないけどね。だからそれがその本を書くきっかけとなったんだけど、この人が日本の演奏家とは違うんだと思ったから書いたんだよね。僕は日本人だと言われると嫌なんだけど、日本人じゃないんなら、じゃあ何なんだと。だから、それは結局今は「それは血なんだよ」と理解してそういう風に考えているんだけど、でも血じゃないのかもしれない。

でもそうしたら出てくる音楽が、日本人だって色々な個性があるから一概には言えないけれども、例えばユダヤ人にある共通した音とか音楽とかがあり、僕はわかるの。フランス人が求めている音とかね。またはロシア人の音とかね。そういうのが不思議なんだけど音にはあるんだよ。それで日本人にもあるの。皆ちょっとずつ違うんだけど、共通したものが、繊細で無情感が漂っているというか、ちょっと無機質でちょっと冷たいんだけど、すましたような音が日本人。だから非常に淡白というか、それはそれですばらしいんだけど、僕は違うんだよ。これは誰からも教わったことはないの。教わったんだったら、僕はこの人の影響ですとか言えるんだけど。教わらないのに出るというのは何なんだろう、というのが僕の疑問でもあったし、その本の著者がおそらくここを突き詰めたいなと思ったきっかけだったんだろうね。だから日本のヴァイオリニストと比較してちょっと違うのは何がそうさせているのだろう？だって僕は日本の学校に通っていたし、日本語は母語だったしね。お袋は僕が高校生くらいまで一緒にレッスン行っていたんだけど、ヴァイオリンの先生から「ぼっちゃんはちょっと違いますね」とよく言われたっていうの。だから、その先生もちょっと違うということしか言えないの。でも何か違うの。もうそれは良くわかんないんだけど。ちょっと

違うのかなと思ったり。

Q）フランスで学んだんですよね？フランスの影響は？

これも自分では意識しているところと無意識のところとあるんだと思うんだけど。ものすごく影響を受けていると思う。だから僕の直接習った先生の音に近いものはあるよね。これは後天的にならったもの、奏法は何年もかかって先生から習ったものだから、奏法が似ていると音も、音の出し方も似たようになる傾向になることがあるんだよね。僕もちょっと似ているけれども、やっぱり僕の音と先生の音は全然違うの。個人的な差というよりもそれ以上に違うの。そうしたら普通ならば日本で生まれて育って 20 歳までいたんだから、どちらかというと日本に近い音が出てもいいはずなのに、どちらかというとこっち（韓国）に近いということはこれは血がなせる業なんじゃないかと。もう血かどうかわからない。もし他の言い方があるのであれば創ってきてもらいたいくらいなんだけど。血と言っても具体的にわからない。

Q）パリに行った時、そこで生活を始めて何かアイデンティティに影響を与えたこととかありますか。

そのときはね、いろんな国からパリに人が来ているでしょ、コスモポリタン、国際都市なのよね。色んな肌の色の違う人もいるし、日本も韓国も中国もわからないわけ。東洋人は皆チャイニーズだと言って。だから韓国なんて何処にあるかわからないし、人によっては韓国語は世界で一番難しい言葉だと思っている人もいて、だから物凄い秘境から来た民族だと思っていたんだろうね。日本はまだフランスは 19 世紀にジャポニズムと言って日本の文化が物凄く流行してゴッホとか色んな人が浮世絵の真似をしているから比較的まだ知名度があるけど、韓国と言っても何だろうと皆思ったみたいね。それはまあ良いんだけど、そこで自分はパスポートは韓国で何かトラブルがあると韓国大使館に行くわけ、僕としては韓国語はできないし、心情的にも助けて欲しいときには絶対に日本大使館に行きたいんだけど、パスポートで行かれないわけね。そりゃあ同じ民族だとわかっていても通じないし、果たして自分のことを理解してくれるかものすごく不安なわけ。これでね、改めてびっくりしてしまって、外国で丸裸なんだなと気づいたの。だから自分をガード、保護してくれる国は日本じゃないの。なんとなく日本にいた時は、親がいて兄弟がいて、親戚、友達があちこちにいてなんとなく日本に守られているんだなという意識が無意識でもあったでしょう。外国に出

たら皆パスポートで判断されるわけでしょう。そうするとこれは妙に居心地が悪いというか、これを解決しなくてはいけないんじゃないかと思った。つまり自分が韓国語ができて韓国人の友人とか知人とかがいっぱいいればそれが取っ掛かりでいいのかもしれないけど、そういうのがないし、韓国の留学生に対してもフランス語や英語で話をしているわけでしょう。そうすると自分が情けないし向こうも韓国人のくせに言葉もできないという目で見ているだろうし。そうすると日本人も沢山行っているから、自然と日本人の仲間に入っていく。勿論韓国人とも付き合うけど、心の依存の度合いが違うわけよね。でもパリにいて思ったことは、そういう狭い枠にとらわれてはいけないとわかったし、僕にとっては精神への解放だったわけ。日本にいてこの狭い社会で、日本人だ韓国人だという、特に一世達が口うるさく言うわけでしょ。日本人がこれまで何をしたかとか。日本人だけは絶対に許せないとか、結婚だけは韓国人としろとか頭から叩き込まれているわけでしょう。そういっても友達は日本人が多いし、日本語しかできないし。僕は日本親派なわけよ。日本人を憎めないし、憎む必要もないし、そういう葛藤もあったし、狭い考え方にも飽き飽きしたし、でもパリにいったら色んな人がいるし、あそこは自由、何をやっても自由で個人の責任でことをする。誰にも頼る人がいないとういうことは、自分の責任を持つということ。それは僕にとっては救いだった。とても居心地が良かった。2-3 年はね。そのうち、西洋と東洋の文化の葛藤というかが頭をもたげてきて、どうしてもバリアを感じた。彼らが当然だと思っていることがおかしく感じるし、僕らが当然だと思ったことがおかしいと言われるし。アメリカはそうじゃないかもしれないけど、パリの石畳というのは最初はかっこいいし、歩くたびに映画の主人公になったみたいで外国にいるんだって実感させてくれる。これが一つのシンボルで自分は留学生なんだという特権意識と喜びがあったけど、2、3 年たったらだんだんしんどくなってきた。うるさいとかではなく、はっきりとした拒否感。足が痛いんだよ。歩けないんだよね、普通に。なんかちょっともう少しやわらかいところを歩きたいと、足にビンビンはねつけてくる。昔、自分が中学高校の頃、京都に住んだときの土の感覚が残っていて、その暖かさというかやわらかさが無性に恋しくなってきたというか。西洋音楽をやっているがここには住めないんじゃないかという漠然とした不安がよぎってきた。

Q）カルチャー・ショックとアイデンティティ・クライシスが始まっていたんですね。

そう、生理的に始まっていたんだね。受けつけられなくなっていた。それと同時にあんなに好きだったフランス料理がもう胸焼けして。でも、うどんとかお寿司とか、韓国料理や中華は大丈夫。つまり東洋人なんだよね。最初はあんなに美味しかったフランス料理がとにかく胸焼けしてしまって。まだ20代なのに。それは不思議というか意識して自分を東洋に回帰とかはないけれども自然にそうなっちゃったの。だからこれはなんだろうと。それでね、そのとき、前から好きだったんだけど、谷崎とか三島由紀夫とか川端康成、夏目とかが凄い理解度で入ってくるわけ。フランス文学やロシア文学もよく読んでいたんだけど、日本文学がバーっと入ってくるわけ。それと同時にシネマテックという安く昔の映画とかを上映するところであるときに日本週間があって100本ほど上映していたので、ほとんど日本映画を知らなかったから観てみたら、こんなにすばらしかったんだと涙がでた。そういう時期だったから作品以上に日本への回帰の時期で思い入れがあったんだと思うけど。

Q）韓国に行ってみたいという気持ちはパリに行ってから強くなったのですか。

そう、だから西洋と東洋の壁にぶつかって。その時は韓国人とは思わず東洋人だと。日本は良く知っているけど、自分のルーツの韓国のことは知らないから、これは知るべきでしょう。そうでないと、日本のことも韓国のことも語れない。そこにいて何か感じて勉強するかはわからないけどとりあえず現地に行って少し何年か居てみよう。それで、2年いた。その期間が終了する最後の時に奥さんと知り合った。その時はもう日本に他の仕事の話があったら日本にきたんだけど、その時は独身で良いことばっかりだった。皆自分は韓国人なんだけど外国から来ていていわゆるお客様なんだよね。だから皆良くしてくれたし、居心地が良くて、単純に自分を受け入れてくれて。でも二度目の6年後に妻と子供を連れて韓国に行って実生活をして現地の人になるためにいったんだから、それから初めて葛藤がどんどん日増しに大きくなっていった。そこでもう韓国人ではなく日本人でもなく何なんだと？在日なのかと？そんなジャンルはあるのかと思って。3年前に日本に帰ってきて今日本とか韓国とかというのを一生懸命演奏しながら自分で解決策を求めているところ。

Q）在日を生き直すということ？

そう、再出発ね。それは自分のアイデンティティを確立するというか、解りたいという。本当に何処から来ているのか。ここから来て何処に行くのかというのを日本に

戻ってやってみたかった。

Q）在日を生きるということはどういうことですか。

意識しているということでしょうね。だから日本人じゃないから韓国人かと思えばそれも違った。であれば在日というジャンルがあるのであれば、まずそれを足場にもう一回生きてみようと。日本人でも韓国人でもなければなんなの？だから在日として再出発をしてみよう。もしこれが間違っていれば軌道修正をすれば良いんだし。一旦ここから出発して、何処に行くのかはわからないけれども、その折に洗礼を受けてクリスチャンになったんだけど。今は在日から再出発したんだけども、この 1、2 年は霊的にはクリスチャンとしての神様に仕えるものとして生き直しているっていう風に変わってきている。だから今は在日とかは、最近あまり意識しないの。周りは意識するんだけど。新聞か何かに出ていても僕のことを「在日韓国人ヴァイオリニスト」ってタイトルつけるのね。何でこんなのつけるの？あるいは「在日のヴァイオリニスト」。必ず「在日」が枕詞のように形容詞につくんだよね。最初、僕は日本に戻ってきて自分から「在日」とつけて再出発しようと思ったから仕方ないけど、今はこれが嫌で、ダサいというかウザったい。ただのヴァイオリニストで良いじゃない。神の子というのは個性があっても平等でしょう。その辺から僕はやっぱりやり直したほうが良いんじゃないかと最近思っているんです。でも、この本では神については何も触れられていないけどね。彼女（著者：篠藤ゆり）にはインタビューの中で言ったから知っているのよ。最初のころじゃなくて書き終えるころにはクリスチャンになっていたから、筋書きができたあとだったから彼女も僕がクリスチャンということをどのように入れたらいいか悩んだのかもしれないし、クリスチャンということをいれると複雑になるから入れなかったのかもしれない。

Q）今は、自分の本当の音を探し当てたんですか。それとも、まだですか。

今は、ほとんど自分の音を持っている。在日とかは関係なく。ただ、人が聴いたら韓国系だなとは思うかもしれない。日本系ではないのよ。あるいはもっと言えば、あるとすれば在日系かもしれない。ただ言える事は、日本人ではないし韓国人に近いけどちょっと違う、あえていえば在日の音かもしれないということを本はクエスチョンマークをつけながら言わんとしている。それが在日として改めて生き直すと言うことかもしれない。もう自分では 80％、もっと練磨して研ぎ澄まされて理想的な音を目

指しているんだけど、自分の音はこんなんだなというのは自分でほとんど把握している。もっと自分を超えた神がかり的な音はまだでると思いますね。演奏会を今までずいぶんやってきたけど最近どんどん変わってんだよね。昔はある殻があって、その中で色々やってきたんだけど自分で殻を破れなかったというのがあったんだけど、韓国からこっちに来てイエス様とあって、どんどん殻を自分で壊していっている。だからこれからますます自分の音は80%わかっているといったけどまだわかんない。わかっていないかもしれない。ただこういう傾向の音だというのは自分では把握しているけど。でもこれからどうなるかわからない。だから自分も楽しみだし、周りの人も何かスリリングでおもしろいかもしれない。

2.「民族ではないアイデンティティ」

世界の名だたる舞台に立ってきた在日二世のヴァイオリニスト、ジョン・チャヌも、ツルネンと同様にカルチャー・ショックとアイデンティティ・クライシスを経験したという。子ども時代、彼は日本に生まれながら自分が日本人ではないことにまず大きなショックを受けたという。物心ついたころから日本名を使う自分に、負のイメージがつきまとい、桐朋学園大付属高校に進学すると同時に本名を名乗った。後に、フランスのパリ国立高等音楽院に留学し、日本にいた時のような日本人だ韓国人だといった二者択一的な狭い枠からの精神的な解放を得るものの、7年に及ぶフランスの留学生活において、今度は「西洋と東洋の壁」にぶつかったという。深いカルチャー・ショックとアイデンティティ・クライシスの反動として、彼は自分の韓民族としてのルーツを探るべく韓国の国立交響楽団のコンサートマスターに就任する。その時、過ごした韓国での2年間は、カルチャー・ショックでいえば異文化接触の第一段階ハネムーン期で何もかもが素晴らしく、同じ民族という血縁を信じて現地の韓国人女性と結婚もする。その後、一時日本に戻るが彼の妻が日本でカルチャー・ショックにあい、韓国での生活を切望したため、再び韓国に戻る。今度こそは「祖国」に骨を埋めるべく固く決意し、妻子を連れて20年近くも韓国で生活した。ジョンは、韓国のKBSの交響楽団の指導者として、また延世大学教授のポストまで得て、何もかも安定した境遇を与えられていた。しかし、彼がそこで見つけた本当の彼のアイデンティティとは、結局「民族ではなかった」という否定性だった。

在日として日本に生まれたジョン・チャヌにとって、アイデンティティをめぐる「魂の遍歴」は長い「民族」の探究の旅となって彼の半生を捕らえ続けてきた。それ

は、本人の意思とは関係なく民族という血族的なアイデンティティに決定づけられた先験性を根拠とする。ギアーツは、そういった国籍、名前、血縁関係という先験性が人の意識や行動の動機付けを促し、その人の人生を左右する重要な要因となっていることを指摘している。浜本は、そうした観点から在日朝鮮人の民族的アイデンティティのあり方を「自分は朝鮮の国籍や名前を持っているから朝鮮人なのだ」、または、「自分は朝鮮の親から生まれたから朝鮮人なのだ」と在日自身の意識を自ら矯め、その自己認識によって行動を起こすことを分析している。そうした意味で、ジョン・チャヌの求めてきた民族的アイデンティティは、すでに存在している先験性に準拠するといった、民族という既成の対象に帰属性や同一性を見出していく作業だったのである。それは、彼自身が「カゴの鳥」と言い表したように、あらかじめ予期できる、予定されたアイデンティティを受容し、それに従うことだったのである。

結局、一人の音楽家として、そして「在日」としてもう一度生きなおすために彼は妻と別れ日本に戻ってきた。こうした彼が再び「在日」を生きるとは、どんなアイデンティティを意味するのであろうか。日本にありながら「定住外国人」として、自らを不確実なディアスポラとして定位するということである。そこでは、国籍や民族の自覚にもとづくアイデンティティのみではとらえられない別様の意識形態が刻みだされている。在日ディアスポラにおいては「日本」と「韓国・朝鮮」のあいだで、帰属の「うつろ」な意識が浮上してくる。ここにおいて在日は自らの文化的根拠が薄弱であることに向き合い、緊張感とともに、両義性、非同一性を彼（女）は引き受けてゆくのである。「在日」という経験は、このように曖昧な境界において、「存在」するという「いのち」の普遍性そのものを現している。「在日」はそれ自体であるのではなく、「日本人」と本国の「韓国・朝鮮人」とのクロスカルチャーな関係において存在し、そして、それらの文化と文化を超越する個としての「いのち」の行為主体なのである。

この二つある「あいだ」という間文化性の開かれた領域において、再び日本に戻ってきたジョンは、思いがけず更なるアイデンティティの変容を遂げることになったのである。今、彼はクリスチャンになり、新たな次元の「超越的アイデンティティ」を体験している。エリクソンの言葉でいえば、「わたし」[(3)] という個としての生の存在の自覚ということになる。そうした彼は、「在日」としての集団的なアイデンティティさえ、最早こだわらなくなったという。目に見えないものに突き動かされて、彼は自分に与えられた“韓国的でもあり日本的でもあるヴァイオリンの音を奏で、普遍的

な「いのちのコンサート」を開催するようになった。ジョンは「新しい人」になったのである。現在まで南北首脳会談を記念しての南北統一コンサート（ユニティーコンサート）をはじめ、JR 新大久保駅での事故で命を落とした方々の追悼コンサートなど、常に“いのち”と“愛”と“平和”への願いを込めたコンサートをジョンは続けている。またクラシックの枠を越えて異分野のアーティストとのコラボレーション他、音楽物語の構成、指揮など幅広い音楽活動に取り組んでいる。

Ⅳ. おわりに

これまで見てきたツルネン・マルテイとジョン・チャヌのアイデンティティの変容は、次のような特徴として捉えることができる。つまり、彼らの異文化接触以前は、比較的同質で安定した社会のなかで自らのアイデンティティを確立する作業であり、すでに社会が与えてくれている役割や機能のなかで、また既成のかなり明確なルーツ（出自）の対象への帰属や関係のなかに同一化していくという作業であった。それは、「統合された，環境の変化に依存しない固定的なもの」として構築されたナショナル・アイデンティティの集団性に自らを明けわたす道である。しかし、異文化接触のカルチャー・ショックによって、この性質は変化してくる。ツルネンは日本において、ジョンはフランスと韓国において、個人のアイデンティティを形成してきた集団文化の枠組み自体が大きく揺れ動き、文化相対主義の視点が芽生え、自己の価値観が大きく拡大して多文化的枠組みを内在化するのである。そして、それまでの既存文化の無意識を超越する新しい主体的な自己の「いのち」が目覚めるのである。これがツルネンのアイデンティティの変容でも述べた「自律」から「独立」への過程であり、ジョンにおいては個としてのヌミノース的な超越的アイデンティティの生起である。それはこれまでの予定されたカテゴリーを受け容れていくアイデンティティとは異なり、より主体的で創造的なスピリチュアル・アイデンティティの発現である。それは唯一無二の個人として、現在必ずしも存在していないが、具体的に存在する文化的差異の関係性のなかで普遍的な意味としての不可視的なアイデンティティを志向し、目標としてのコスモポリタンな人類的アイデンティティを解釈する「新しい人」のあり方である。

次回は、「魂のピアニスト」と呼ばれるフジコ・ヘミングと元ペルー大統領のアルベルト・フジモリのアイデンティティの変容について、インタビュー調査の結果を紹介していきたい。

注

(1) S.Hall, 1990.

(2) カルチャー・ショックは新しい文化の学習と個人の人間成長という広い視野の中で捉えることができる。アドラーによれば、それによって自文化が異文化によってコントラストされ、その輪郭がいっそうはっきりと見えてくる経験であり、また異文化理解だけでなく自己理解の深化とそれに基づく変容（成長）をもたらす学習経験であると述べている。彼は、異文化接触に際して個人が経験するカルチャー・ショックのメカニズムについて、次のように五つの体験的要素に分類し、その心理的過程を認知面、感情面、行動面の 3 つの側面において分析している。（Adler 1975: 12-23, 76）

1) **異文化との接触：** 異文化に興味を示し、新しいものを発見した喜びで、興奮や感激を覚える段階。異文化と自文化の相違点よりも共通点に関心を示す。

2) **自己崩壊：**両文化の相違点が目に付き始め、文化的差異に圧迫される。自文化とのつながりや、自文化の心理的安定を失うことを恐れる。新しい文化での手がかりを見失い、期待されている社会的役割を予想できず、自尊心を失うことを恐れる。疎外感を感じ始め、不適応体験によりアイデンティティとパーソナリティ面に脅威を感じる。混乱、喪失、とまどい、孤独、無力感などに充たされる。

3) **自己再統合：**排他的、批判的態度などにより文化的差異を認めなくなる。好き嫌いの先入感により異文化を拒絶する傾向がある。強い代償行為、自己主張的行動が目立ち、同時に自尊心が成長する。

4) **自律：**文化面の差異と共通点に気付き、それらを正当と認める落ち着きを取り戻す。異文化の生活に馴じんだ行動をとり、柔軟な性格が強まる。差異に対応し、防禦的姿勢がなくなり、自制力、自信、自立性が出てくる。

5) **独立：**文化的差異と共通点が正しく評価され、異文化での生活の意義を見いだす。選択力がつき、責任ある行動が生まれる。将来の移行体験を有益なものとすることができる。より表現的、創造的、自己実現的になる。

(3) エリクソンは、人間のスピリチュアリティを「超越的アイデンティティ」として、「わたし」という言葉で表している。1981 年 Yale Review 誌に掲載された論文、“The Galileaan saying and the sense of ‘I’ “(The Yale Review, 1981, April, pp.321-362) において、エリクソンは「わたし」を「心理学と神学とのボーダーラインに潜む生きた現象」として、「自称代名詞」（Self-designating pronoun）における「霊的人格」（the spiritual personality）として明らかにしようとしている（西平 1993：235-237）。「わたし」の感覚（a sense of "I"）は、人に「一つのヌミノース的中心」（a numinous center）である「個人」としての意識を与える（Yale Review 1981, P.329）。この感覚（a center of awareness）は、自己の生の存在を深く「自覚する」機能における中心性である。そうした「わたし」の意識は、いかなる集団的アイデンティティへ自己を投影したとしても決して得ることができない他者とは独立した内面の固有のあり方である（稲垣 2004:103）。それは、極めて個人的でヌミノース的感覚であるから、生きているという感覚（a sense of being alive）、ひいては生き生きと存在しているという感覚（of being the vital condition of existence）と、ほとんど同義になると説明されている。それゆえに、こうした人間の生の領域は、「集まったもの」（the masses）、抽象化されたものには存在せず、実際に在る生命力のみによって影響を与え、個々の生のみに現れ、個

別的に経験されるのである。

参考文献

ギアーツ，C.（1987）.『文化の解釈学』2（吉田禎吾・柳川啓一・中牧弘允・板橋作美訳）「岩波現代選書」東京：岩波書店.

ツルネン・マルテイ（1993）.『日本人になりたい —— 青い目の私が政治家を志した理由』東京：祥伝社.

西平直（1993）.『エリクソンの人間学』東京：東京大学出版会.

浜本まり子（1996）.「在日朝鮮人 —— 在日朝鮮人のアイデンティティの問題」青木保・他編『移動の民族誌』「岩波講座文化人類学第７巻」東京：岩波書店.

Adler, P. (1975). “The Transitional Experience: An Alternative View of Culture Shock,” *Journal of Humanistic Psychology*, 15(4): 12-23.

Erickson, E. (1981). “The Galileaan saying and the sense of ‘I’,” *The Yale Review*, April: 321-362

New Person

<Summary>

Rika Kanayama

As globalization spreads, it is becoming clear that nationalistic identity tends to encourage ethnocentrism in order to preserve one's traditional, group identities while fighting against Westernization. However, another rising force, the Diaspora Identity, is free from rigid group identities represented by nations and ethnic groups, and it aims to search for one's individualistic identity. This paper focuses on how the Diaspora Identity has been changed through the effect of globalization. The Diaspora Identity opens the possibility for one to establish his or her Cosmopolitan identity as a unique new person. The cross-cultural experience and culture shock can be described as a creative self-destruction in the sense that it brings about break-through from person's cultural unconsciousness, comprised of old belief systems formed by his or her former culture and drives a person into an identity crisis. When a person passes a critical point in the experience of different cultures, he or she experiences a paradigm shift or a serious transformation of self and thought patterns. This individual then overcomes ethnocentrism and embraces new values suitable to living in the new culture while becoming self-aware of his or her traditional culture and how it relates to his or her new environment. By doing so, he or she gains a new individual identity that keeps proper distance from any particular cultural unconsciousness and starts having culturally relativistic views. By tearing down the wall of one's old group identity, a person widens his or her perspective and captures new personhood. This paper describes the new person by introducing the result of interviews with Tsurunen Marutei and Jung Chanwoo.